
宝珠の煌めき

飛唯恭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宝珠の煌めき

【Nコード】

N1514T

【作者名】

飛唯恭

【あらすじ】

自サイトからの転載となります

龍の一族の長、

鎮也【シズヤ】

掌中の珠と慈しむ一族の娘

朱璃【アカリ】

こちらは親世代の番外編となります。

徐々に本編も移動するつもりです。

？

黄金色の、柔らかな長い髪を靡かせた可憐な少女。

紫水晶の様な煌めきを放つ瞳は、空を仰ぎ微笑みを浮かべる。

「ほら、御覧下さいませ！

朱璃お嬢様！！

鎮耶様の御立派な事！」

側に控える女官達は、ほうっと羨望の溜め息を漏らした。

「本当！！

素敵だわ。鎮耶兄様！！」

長い身体を宙に躍らせ、時折、雲の切れ間を潜り抜ける龍体。

蒼の空を自由自在に泳ぐ姿に、一族の者は見惚れている。

数匹の龍の姿が躍る中、鎮耶の翔ける様は格別に美しい。

若き龍の長が友と共に、空を翔ける。

彼は雷雲を呼び寄せ、稲光が周囲の山を駆け巡り、昇龍する様を披露していた。

海底の龍の宮から、結界の張られた海の小島の館に、一族の者は集まっている。

真夏の眩い陽射しの中、雷雲から降り注ぐ強い雨垂れを合図とし、龍の宮の宴が始まった。

雅な大人達の中、一際目を引くのは凜とした少女。

無邪気さと利発さを兼ね備え、大人達の目尻を緩ませている。

母は頭の鋭さを認められ、家の世継ぎとなった麗人。

父は長の武技の相手に仕える逞しき武人。

恵まれた血筋を引く少女。

「私、鎮耶兄様達の手合わせが早く見たいわ。」

無邪気に微笑み、朱璃ははしゃいだ。

「もうすぐ、結界に戻って来られましょう。」

でも、今回は武技の御披露目は短い様ですけど…」

周囲の大人は、物知り顔で互いに目配せしている。

「ええっ！何故？

いつも、皆楽しみにしてるじゃないの？」

訝しげに首を傾げて聞く朱璃に、笑みを浮かべる大人達。

「鎮耶様に御目通りしたい方々が、御待ち兼ねなのですよ。

西海の一族の御嬢様もいらっしやっていますもの。」

女官の一人が、朱璃の耳元で囁いた。

「ええ、私も御挨拶に伺ったわ。」

「若長も、そろそろ落ち着かれて良い頃ですからな。」

頷き合う大人達。

「あの方が、兄様の奥様になるの？」

「これ程良い縁組はございませんからね。

上手くいけばと皆、願っております。」

遠くから歓声が響き渡った。

若長、鎮耶が小島の館に姿を現したのだ。

彼は頭を下げる臣下達に労いの言葉を掛けながら、館の中に入った。行った。

「さあ、我々も中に参りましょう！」

庭園に居合わせ者は、いそいそと足を進める。

朱璃も促され、宴の席へ足を運んだ。

岩に碎ける波の音が、静かな夜に響き渡る。

年若い朱璃は、一足先に宴を退席し、離れに用意された寢室に戻っていた。

雅な衣装から気軽な部屋着に着替えた少女は、庭先から砂浜へと続く松林の小道を辿っていた。

側仕えの者も宴を楽しんでいるらしく、こっそり部屋を抜け出すのは訳も無い事。

月明りの下、淡い翡翠色の着物と、黄金色の髪が浮かび上がる。

白い砂をさくりさくりと鳴らし、朱璃は林を抜けて行く。

緑の闇を抜ければ、そこに艶やかな黒髪を靡かせ佇む一人の男の姿。

「…鎮耶兄様？」

振り返れば、彼の蒼の瞳が驚いていた。

「朱璃！」

供も連れず、抜け出したのか？

…幾ら結界内で安全とは言え無防備だろう。」

朱璃は、慌てて駆寄る若長の姿に、思わず顔を綻ばせる。

「兄様こそ、御一人で抜け出して良いの？」

あんなにたくさんの方に囲まれて、私、お話する間も無かったのに。」

側まで来ると、彼は松林の入口に有る岩に腰を下ろした。

「一人の時間も欲しくなるさ。」

ずっと、人に囲まれてたんだ。

だから、見逃しておくれ？」

くすつと笑う朱璃に、鎮耶はおどけた口調で懇願した。

「奥様候補の方も御見えになってらっしゃるのに、大丈夫かしら？」

落ち着かない様子の、姉様方もいらした事だし…」

少し棘の有る言葉を返す少女に、鎮耶は苦笑いを返す。

「まあ、そう言っな。

お前にまで大人びた口調で説教されると、益々気が休まらぬ。」

鎮耶は手招きをし、朱璃を隣りに座らせた。

「冗談よ、兄様。

目が覚めて寝付け無いから、散歩に連れて行って頂いたって言っわ。

それなら、良いでしょう?」

「ああ、助かるよ。」

若長は、手足を伸ばし寛いだ様子で言った。

「ねえ、誰にも言わないから聞いても良い?

鎮耶兄様は、伴侶にしたい方いらっしやるの?」

紫水晶の瞳は、蒼色の瞳を見上げた。

「朱璃に、そんな事を聞かれるとはな…」

…まだ：自分でも判らぬよ。一族の長の妻でも有るからには、血筋や人柄の善さだけでは俺には選べないからな。」

真つ直ぐに見つめる少女の瞳に、戸惑いがちに言う若長。

鎮耶は、先代がかなりの高齢になって生まれた、待望の男の跡継ぎだった。

姉達も龍の能力は高かったが、末子の鎮耶には敵わなかった。

先代の長は幼い鎮耶を慈しみ、成体となった事を喜びながら、寿命を全うして逝った。

家族と、一族の信頼と結束を一身に背負い、鎮耶は若くして龍の長となる。

だからこそ、彼は伴侶となる者に、自分を支えてくれる事を心の内で欲していたのだ。

「じゃあ、私、早く素敵な出会えます様にとって祈っておくわ。

兄様が気に入った方なら、私も好きになれる筈なもの。」

真つ直ぐな瞳は、鎮耶の心を自然と和らげる。

「有り難い。

でも、俺は朱璃の相手には、意地悪をするかもしれないぞ？

大事な妹を娶るならば、それ相応の覚悟が無ければな。

まあ、私以上にお前の父が試すだろうか…」

鎮耶は手を伸ばし、朱璃の頭を撫でる。

さらさらと風にそよぐ、柔らかな金糸。

人形の如く愛らしくは有るが、強い意思を浮かべる紫の瞳。

…さぞや、艶やかに咲き誇るだろう。

「兄様？」

「朱璃は…どんな相手を選ぶのだろうか？」

一瞬きよとんした表情は、少女そのものだったが、艶やかに微笑み
彼女は言った。

「ずっと私と向き合ってくれる方よ！」

「良い事も嫌な事も、心を伝え合える方！」

月明りを受け、満面の笑みで無邪気に言い切る少女に、鎮耶は一瞬
目を奪われた。

まだ子供だと思っていながらも、その正直な言葉は鎮耶の胸に深く残った。

「…そうか。」

そうだな、朱璃が、互いに気持ちを通じ合う片割れと巡り逢う様祈ってるよ。

俺も、そんな相手と巡り逢いたいしな。」

微笑みながら頷く朱璃。

「やっぱり、散歩に出て来て良かったわ。兄様とゆっくり話が出来て嬉しいもの。」

「俺もだよ…」

さあ、少し歩いたら部屋まで送ろう。

まだ、宴に残ってる者もいるし、もしかしたら、お前を探してる者も居るかもしれないからな。」

朱璃の華奢な手を握り、鎮耶はゆっくり立ち上がる。

白い砂浜には、月光に照らされた二人の足跡。

他愛ない話を交わし笑い合つ、素顔の若長と少女の姿。

懐かしい夏の宴の思い出は、鎮耶と朱璃の心に刻まれる。

?

年月は緩やかに流れる。

少女は蕾を花開かせ、眩い美貌と、艶やかさを醸し出す年頃となった。

一族の男達の心をつらえながらも、彼女の心を揺り動かす者はまだいない。

無邪気な蝶の如く、微笑みを浮かべ軽やかに人々の間を飛び回るが、捕らえようとするとふわりと身を翻す。

そして、凜とした様で、甘い言葉から逃れる彼女に溜め息を漏らす男は後を絶たない。

「鎮耶様、昇龍する御姿、拝見出来て嬉しゅうございました。」

小島の館での宴で、恭しく彼女は言う。

「朱璃に会えて嬉しいよ。　なんだ。もう、兄様とは呼んで貰えないのか？」

ちらりと、隣りに並ぶ父母の姿に目をやり、

「私も大人になりましたので、気軽に兄様と呼ばせて頂くのも気が引けますもの。」
と、卒無く言った。

「淋しい気もするが、仕方無いか。
今宵の宴、楽しんでおくれ。ゆっくり話などしたいしな。」

にこやかに微笑み、一礼をし彼女は長の前から下がった。

二人が海底の宮で顔を合わす機会は、以前よりも減っていた。

幼い頃は父に伴われ、長の館に頻繁に出入りしていた朱璃だが、年頃ともなるとそう言う訳にもいかない。

別段、娘を家から出さぬと言う訳では無い。

只、龍の長の住まう館は、無邪気に遊びに行ける場所では無いのだ。

だからこそ、宮での宴や、他の結界での宴は、二人が昔と同じ様に話す事が出来る、楽しみの時間となっていた。

こっそりと抜け出し、散策をしながらの無邪気な会話を二人は大切

にしているのだ。

格式ばった言葉使いを取り払い、無邪気な会話を交わす時間。

互いの取り巻き達も、本当の兄弟の如く仲の良い二人の邪魔などする筈も無かった。

爽やかな夜風が、松林を揺らす。

浅葱色の薄絹を身に纏い、朱璃の金糸が、月の明かりに照らされ輝いている。

「こちらよ鎮耶様！」

黒髪を背中で束ね、松林の小道から龍の長が姿を現す。

瞳の色よりも深い蒼色の涼しげな衣が、月明りによく映えていた。

「大分、遅くなってしまったな。

宴を抜けてから、ずっと外に出ていたのか？」

さくりさくりと白い砂を鳴らしながら、朱璃は砂浜を歩く。

彼女は鎮耶の側に寄ると、白魚の様な、白く華奢な握り拳をそっと差し出した。

「ほら！ 綺麗でしょう。」

そう言っつて、開いた掌の上には桜色の貝殻。

そして、彼女は鎮也の手を掴み貝殻を半分程手渡した

朱璃の極上の微笑みは、人疲れした鎮也の心を和ませる。

別段、彼が長としての顔を使い分けられているとは言い難い。

だが、掌中の珠とも呼ばれる彼女の存在は、やはり特別なのだろう。

今までにも、疲れを癒す恋人がいた時もあった。

だが、深い付き合いの女性も、年月が経つても伴侶を決めぬ鎮耶の心に不安を抱き、自ら去った者もいる。

彼自身、龍達の中で、魂の片割れと呼ばれる伴侶には、未だ出会ってはいないと感じていた。

長としての立場で妻を娶る事を考えながらも、己の伴侶との出会いには心惹かれるものもある。

「やはり…朱璃と過ごすのは気が楽で良いな。」

彼は掌の桜貝を指先で摘み、月光に翳す。

「お疲れね。鎮耶兄様…」

いい加減、奥様を娶られれば？

安息の場所は探すだけではなくて、互いで造るものでしょう？

次に心魅かれ、側に居て欲しいと思う方と、一緒になれば良いのよ。

「

「朱璃はどうだ？

心魅かれる者に出会えたのか？」

鎮耶は、翳した貝殻を朱璃の手に握らせた。

「さあ…どうかしら？」

私は、まだまだ兄様よりも若いわ。

だから、男の方を見る目を、もう少し養ってからでも良いでしょ？」

おどけた口調で言う朱璃に、鎮耶は苦笑する。

「そうだな…
お前に愛しい男が現われれば、こうして話を交わす時間も無くなっ
てしまっただろうしな。
それを考えると、しばらくはそのまま無邪気な朱璃で居て欲しいよ
…」

「随分、都合の良いお話ね。」

朱璃はふうと小さな溜め息を漏らすと、その場に座り脚を伸ばした。

「兄様も御座りになったら？砂が、とても気持ち良いわ。」

朱璃は、長の衣の裾を軽く引っ張った。

鎮耶は砂に手を着き、月を仰ぎ見た。

「たまには、一族の長から離れて、こうしてのんびり過ごす事も大
切よ？」

朱璃は、白い砂の上に桜色の貝殻を並べる。

鎮耶も同じ様に、白い砂に桜貝を置いた。

鎮耶はその手を伸ばし、月明りに煌めく黄金色の髪を優しく撫でる。

「朱璃のお陰で、良い息抜きが出来たな…」

髪を撫でる鎮耶の手を取り、朱璃は大人の顔で微笑み、優しく言った。

「兄様、少し横になれば？」

宴のお酒も残ってらっしゃるみたいで、とても眠そう。 さあ、私の膝に頭をお乗せになって。」

朱璃は、鎮耶の腕に手を掛け、自分の膝を叩きながら促した。

「おいおい朱璃、幾ら親しくとも、年頃の娘の膝を借りるのはどうかと思うぞ?」

「私と鎮耶兄様の間に、そんな遠慮は要りません！ さあー!どござ。」

ごく自然に、鎮耶の肩に手を掛け、自分の膝へ上半身を引き寄せる。

鎮耶の黒髪を優しく撫でながら、

「今は龍の長では無く、只の鎮耶様のお時間なの。

だから…少しだけ朱璃の膝で素顔のまま寛いで下さいね…」

滑らかな薄絹越しに、柔らかな肌の温もりが伝わる。

鎮耶が目を上げると、紫水晶の様な瞳が、優しく彼を包んでいた。

彼は、ふと、気付く。

何も飾らない本当の自然体の自分を。

かつての恋人達も安らぎをくれた。

それは、確かだ。

だが、付き合いが長く深まる程に、どこか切なく淋しげな瞳を彼に
向ける。

どうしたと問えば、何もと返す。

しかし、鎮也は判っていた。

「……私を選んで下さらないのね……。」

彼女達の、心に積み重なる眩きは、次第に瞳に滲み出るのだ。

龍の生きる時間は長い。

それを理由に、逃げている自分を感じなかったと言える嘘になる。

「素顔の俺か……」

朱璃の温もりは鎮耶を和ませ、打ち寄せる波の音は眠りを誘う。

「昔とは逆だな。」

前は、小さな朱璃を膝で眠らせていたのに……」

海と朱璃、夜空に月。

今、鎮耶の視界に有る物全ては、長としての緊張を解き放ち、有るがままの自分を受け入れてくれる。

鎮耶の頭の上では、朱璃が桜貝を指先で摘みながら、月に翳して微

笑んでいた。

「柔らかな桜色が、月に映えてとても綺麗ね…
白い砂や、波に揺られるのを見ているのも素敵…」

他愛ない言葉を、次々と紡ぐ朱璃の唇。

睡魔が訪れる中、鎮耶は思った。

桜色の貝殻と、朱璃の唇はよく似ていると…

白い肌に、とても良く映える桜色の唇。

月光に煌めく桜貝。

月明りを受ける朱璃の唇。

そのどちらにも、堪らなく愛しい。

意識が消えてゆく中、鎮耶はその桜色に触れたいと感じる自分に気が付いた。

極上の時間。

至福の一時に癒され、龍の長は束の間の休息に瞼を閉じる。

「…鎮耶兄様…？」

「…お眠りになったのね。」

声を潜め、鎮耶を覗き込み、寝顔に安心する朱璃。

「…愛しく思う方か…」

私には、まだまだ判らない事で一杯。

だって、今は、兄様以上に向き合える方なんていないんですもの。

確かに、心許せると思う方もいるわ。

だけど…何かが違うのよ。」

朱璃は、取り巻き達を思い浮かべる。

皆、心映えも優れ、それぞれに秀でる物を持っている。

朱璃自身は高い身分だが、彼女は身分差を特に気にはしない。

話してみたい者がいれば、自分から声を掛け、時には討論を交わす。

誰とも真摯に語り合い、素直に耳を傾ける態度は生意気とは取られず、寧ろ好感を増してゆく。

その生き生きとした魅力は、皆が見惚れる麗しさと相俟って、更に彼女を輝かせるのだ。小さな溜め息が、朱璃の唇から零れ落ちる。

「皆の羨望と、憧れを一身受ける鎮耶兄様…

そんな方を間近で見過ぎて、目が肥えてしまったのかしら？」

小首を傾げて、朱璃は鎮耶の黒髪を撫でる。

鎮耶様を取り巻く、眩い女の方達。

妹の如く寵愛を受ける私には、大人の顔である方々に応える鎮耶様が、遠い人に感じる時もあった…

でも…大人になるにつれて、私の前で見せてくれる素顔こそ大切だと思えるの。

誰も知らない長の顔。

私にしか見れない、鎮耶様の無防備な姿。

「鎮耶様以上の男の方か… その方も、こうして私の膝で眠らせてあげたいわ…

それまでは、鎮耶兄様専用にしておくわね。」

くすつと笑い、朱璃は限り無く優しい瞳で寝顔を見つめる。

まだ見ぬ番いの片割れとの時間も、この様に静かに温かく有ればと思いつながら、彼女は目に映る全ての物に愛を送る。

命を与えられ、育まれたこの海。

白い砂浜と、夜空に煌めく月。

惜しめない愛情で慈しんでくれる我が長、鎮耶。

指先の桜貝に唇を寄せ、朱璃はそつと囁いた。

「なんて素敵なお夜なんでしょう！……
我等が一族の長に感謝を……」

朱璃は桜貝を桜色の唇に重ね、それを鎮耶の唇へと近付けた。

彼の唇に軽く触れる桜色。

「まだ、夜が明けるまでには時間が有るわ……
ゆっくり眠ってね。

鎮耶様………」

鎮耶の寝息が、微かに指先に掛かる。

朱璃は、まるで子供を寝かせるかの様に、優しくゆっくりと、彼の髪、肩から背中を撫でてやった。

響き渡るのは、波の音だけ。

龍の長は只の鎮耶に戻り、優しい眠りに癒される。

昔から変わらぬ、朱璃の優しい瞳に包まれて……………

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1514t/>

宝珠の煌めき

2011年6月3日10時48分発行